

第28回 くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート

George Frideric Handel (1685-1759)
MESSIAH - A Sacred Oratorio

ヘンデル：オラトリオ《メサイア》

～ピリオド楽器使用／ピリオド唱法による～

Program

第1部 PART THE FIRST (1. ～ 6d.) [約51分]

休憩 interval (約15分)

第2部 PART THE SECOND (7. ～ 17.) [約52分]

休憩 interval (約10分)

第3部 PART THE THIRD (18a. ～ 20.) [約34分]

2015年11月15日(日)

13:30開場 14:00 プレトーク 14:30開演

一橋大学兼松講堂

主催：ボランティアチーム如水コンサート企画

後援：(社)如水会、新三木会、国立市、国立市教育委員会、国立市社会福祉協議会、国立市商工会、
国立市観光まちづくり協会、国立市商業協同組合、国立商工振興(株)、国際ソロプチミストくにたち

特別協賛：(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団

協力：一橋大学管弦楽団、「Café ここのたの」(一橋大まちづくりサークル)

指揮とチェンバロ：渡邊順生
Harpichord & Direction: Yoshio Watanabe

共同音楽監督：ジョン・エルウィス
Musical Direction: John Elwes

独唱及び合唱
Solo and Chorus

ソプラノ：鈴木美登里、阿部雅子、川辺茜
Soprano: Midori Suzuki, Masako Abe, Akane Kawabe

アルト：青木洋也、谷地畝晶子、中嶋俊晴
Alto: Hiroya Aoki, Akiko Yachiune, Toshiharu Nakajima

テノール：ジョン・エルウィス、櫻田亮、鏡貴之
Tenor: John Elwes, Makoto Sakurada, Takayuki Kagami

バス：浦野智之、小田川哲也、小藤洋平
Bass: Chiyuki Urano, Tetsuya Odagawa, Yohei Kotoh

オーケストラ：ザ・バロックバンド（ピリオド楽器使用）
THE BAROQUE BAND [with Period Instruments]

ヴァイオリン：荒木優子、渡邊慶子、 竹嶋祐子、山内彩香、廣末真也	Violin: Yuko Araki, Keiko Watanabe, Yuko Takeshima, Ayaka Yamauchi, Shinya Hirose
ヴィオラ：森田芳子、深沢美奈	Viola: Yoshiko Morita, Mina Fukazawa
チェロ：エマニュエル・ジラルド、懸田貴嗣	Cello: Emmanuel Girard, Takashi Kaketa
コントラバス：笠原勝二	Double Bass: Shoji Kasahara
オーボエ：尾崎温子、江崎浩司	Oboe: Atsuko Ozaki, Koji Ezaki
トランペット：村上信吾、永井友貴	Trumpet: Shingo Murakami, Yuki Nagai
ティンパニ：二ツ木千由紀	Timpani: Chiyuki Futatsugi

プレトーク：藤原一弘
Moderator: Kazuhiro Fujiwara



～生菓子も焼菓子も‘くにたち’がいっぱい詰まっています～

‘くにたち’らしい‘くにたち’だけのお菓子がここにはあります



洋菓子

国立 白 十 字



南口店	国立市中1-9-43	042(572)0416
富士見台店	国立市富士見台1-37-28	042(572)1718

Profile

渡邊順生 Yoshio Watanabe (指揮／チェンバロ)



1973年一橋大学社会学部卒業。2010年度サントリー音楽賞受賞。アムステルダム音楽院にてチェンバロをグスタフ・レオンハルトに師事し、'77年最高榮譽賞付きソリスト・ディプロマとプリ・デクセランス(オランダの音楽教育課程での極め付きの賞)を取得。'80年に帰国以来、古楽器演奏の啓蒙と普及に努め、指揮者、チェンバロ・フォルテピアノ及びクラヴィコード奏者として精力的に活躍。ブリュッヘン、ビルスマをはじめ欧米の名手達とも共演多数。多数のCDをソニー、コジマ録音等よりリリース。その多くが特選盤となる。『モーツァルト：フォルテピアノ・デュオ』(コジマ録音)で2006年度レコード・アカデミー賞(器楽曲部門)を受賞。楽譜の校訂や論文執筆なども手がけ、著書『チェンバロ・フォルテピアノ』(東京書籍)は高い評価を得ている。上野学園大学客員教授、桐朋学園大学、東京音楽大学、国立音楽大学各講師。

ジョン・エルウィス John Elwes (テノール)



1946年英国生まれ。このテノール歌手の膨大なレパートリーは、エリザベス一世の時代から20世紀音楽にまで及び、ヨーロッパの古楽声楽界の頂点に君臨している。ロンドンのウェストミンスター大聖堂の首席聖歌隊員を経て英国王立音楽大学に進学後、ルネサンスやバロック音楽に関心を持つようになり、ラモー、モンテヴェルディ等のオペラのタイトルロールや、バッハの受難曲の「福音史家」、あるいはドイツ・リート of 繊細な解釈には定評がある。グスタフ・レオンハルト、ニコラウス・アーノンクール、ロジャー・ノリントンなど、数多くの主要な指揮者と共演し、有名レーベルで100以上の録音を行っている。1990年の初来日以来、渡邊順生(指揮)／ザ・バロックバンドとの度々の協演は聴衆に感銘を与えており、兼松講堂での「バッハ／ヨハネ受難曲」(2010年5月)、《モンテヴェルディ／聖母マリアの夕べの祈り》(2014年10月)は忘れ難い。

鈴木美登里 Midori Suzuki (ソプラノ)



神戸に生まれる。京都市立芸術大学声楽科及び同大学院修了。京都音楽協会賞受賞。ドイツリートを、佐々木成子、中山悌一、鳥井晴子、三井ツヤ子に、イタリアオペラをアンドレア・バランドーニの各師に師事。1991年、兵庫県芸術文化海外留学助成金を受けオランダに留学。グレゴリオ聖歌からバロック期に至る声楽音楽を、マックス・ファン・エグモント、レベッカ・スチュワートの各氏に師事。ディプロマを取得した後、国内外の多数の古楽グループに参加し演奏活動やレコーディングを行う。2000年に帰国してからは、ソロ活動の他、中世・ルネサンス・初期バロック期の声楽アンサンブルの研究に力を注ぎ、コンサートや講習会など積極的な活動を展開している。マドリガーレ・アンサンブル『ラ・フォンテヴェルデ』主宰。

櫻田 亮 Makoto Sakurada (テノール)



東京藝術大学大学院修士修了。1997年よりイタリアを拠点にヨーロッパ各国で幅広く演奏活動を行い、オッターヴィオ・ダントーネ、クラウディオ・カヴィーナ、ジョルディ・サヴァールなど多くの著名な指揮者とソリストとして共演。国内ではサヴァリッシュ指揮のNHK交響楽団、鈴木雅明指揮のバッハ・コレギウム・ジャパンなど、多くのオーケストラと共演。2002年ブルージュ国際古楽コンクール第2位など受賞多数。日本イタリア古楽協会運営委員長としてイタリア・バロック音楽の普及に務めている。現在、東京藝術大学声楽科准教授。

藤原一弘 Kazuhiro Fujiwara (音楽学)

1978年より故鍋島元子氏主宰オリゴ・エト・プラクティカにてチェンバロを学ぶ。'80年よりチェンバロ調律師として活躍。'85年獨協大学ドイツ語学科卒。'90年立教大学大学院修士課程修了(組織神学、音楽学)。'91年ヴェルクマイスターに関する論文により辻莊一賞受賞。'95年同博士課程中退。'91-'98年チュービンゲン大学音楽学研究所('91-'93年DAAD奨学金)。'95-'98年プエッフィングにて合唱指揮者。明治学院大学キリスト教研究所研究員を経て現在に至る。故杉山好氏主宰・宗教音楽講座(通称バッハ・ゼミ)を2011年11月より引き継ぐ他、バッハのオルガン作品について学ぶオルガニストのための講座を長く担当。バッハ・コレギウム・ジャパンのカンタータ全曲演奏会シリーズでは歌詞対訳を行った。洗足学園音楽大学、青山学院大学、北海道大学非常勤講師。

中庭に面した明るく落ち着いた
雰囲気の店内でイタリア料理を
お楽しみください

お電話でのご予約をおすすめします

リ스토랑テ国立文流 TEL.042-571-5552

東京都国立市東 1-6-30 パティオマガノリア1F(JR 国立駅(南口)より徒歩3分)

◆営業時間：昼 11:30 ~ 14:30(L.O.) 夜 17:00 ~ 21:00(L.O.)

◆姉妹店 リ스토랑テ高田馬場文流 TEL.03-3208-5447



**阿部雅子 Masako Abe (ソプラノ)**

国立音楽大学大学院修士課程、同大学院後期博士後期課程音楽研究科声楽研究領域修了。博士号(音楽)取得。モーツァルト《イドメネオ》イリア、プッチーニ《つばめ》リゼット、モンテヴェルディ《ポッペアの戴冠》ポッペア、ロータ《かしこいリス》(日本初演)タイトルロールほか、《メサイア》《第九》などのソリストを務める。N響団友会との共演や、ニューヨークの国連イベント(2014)への出演など、活動の場を広げている。ソリストとして参加したベルゴレージ《スターバト・マーテル》(ムジカ・アンティカ・サッポロ vol.5)が、平成26年度札幌市民芸術祭大賞を受賞。

**川辺 茜 Akane Kawabe (ソプラノ)**

横浜市出身。国立音楽大学大学院修士課程声楽専攻独歌曲コース首席修了、同大学院博士後期課程音楽研究専攻単位取得退学。ドイツ歌曲を中心に、オペラ、宗教曲のソリストを務めるなど活動の場を広げている。2009年サイトウ・キネン・フェスティバル「若い人のための室内楽勉強会」にて白井光子氏のマスタークラスを受講。第21回友愛ドイツ歌曲コンクール第2位、R.Strauss協会賞及び聴衆賞を受賞。'11~'12ウィーン国立音楽・演劇大学へ留学。声楽を長島剛子、C.スペンサー、A.ハースの各氏に師事。現在、国立音楽大学大学院研究生として博士論文を作成中。



photo:Eiji Shinohara

青木洋也 Hiroya Aoki (アルト)

東京生まれ。ヴァイオリンを学ぶ傍ら、ボーイ・ソプラノとして東京少年少女合唱隊時代より活躍。東京藝術大学大学院で古楽演奏、エリザベト音楽大学大学院で宗教音楽学を学び、在学中より定期的に渡欧して研鑽を積む。J.S.バッハの《マタイ》《ヨハネ》の両受難曲や、多数のカンタータの独唱をつとめる。バッハ・コレギウム・ジャパンの主要メンバーとして国内外の公演・録音に参加している。2014年に発売したソロアルバム「イギリス・リュート歌曲」はレコード芸術誌において特選盤に選ばれる。

**谷地畝晶子 Akiko Yachiune (アルト)**

岩手大学教育学部芸術文化課程音楽コース卒業。東京藝術大学音楽研究科博士後期課程独唱科修了。第16回日仏声楽コンクール第1位。2012年度三菱地所賞受賞。J.S.バッハ「クリスマスオラトリオ」、「ロ短調ミサ」、「マタイ受難曲」、「ヨハネ受難曲」、モーツァルト、ヴェルディ「レクイエム」等宗教曲のソリストを務める。岩手大学、岩手県立大学非常勤講師。

**中嶋俊晴 Toshiharu Nakajima (アルト)**

京都市立芸術大学音楽学部声楽専攻、東京藝術大学大学院古楽科修了後、ウィーン国立音楽大学大学院リート・オラトリオ科に留学。バッハやヘンデルなどのオラトリオ作品、バロックオペラを中心に演奏活動を展開する一方、第7回国際ペティレック現代音楽コンクール第2位(ウィーン)、第21回ブラームス国際音楽コンクール特別賞(ベルチャッハ)、友愛ドイツ歌曲コンクール第2位を受賞するなど歌曲の分野においても高い評価を得ている。これまでに三井ツヤ子、野々下由香里、G.テュルク、G.レヒナー、C.スペンサー、D.ルッツの各氏に師事。

**鏡 貴之 Takayuki Kagami (テノール)**

岩手大学卒業、東京藝術大学大学院修了。声楽を佐々木まり子、佐々木正利、多田羅迪夫の各氏に師事。主にオラトリオ、宗教曲のソリストとして活動中。特にJ.S.バッハの作品では多数のソロを務め、活動の中心になっている。また、2011年2月にはソロリサイタルでシューベルト《冬の旅》を歌い好評を博す。第4回東京国際声楽コンクール第1位、並びに審査員特別賞、東京新聞賞受賞。バッハ・コレギウム・ジャパンの声楽メンバーとして国内外の演奏や録音に携わっている。

**浦野智之 Chiyuki Urano (バス)**

東京藝術大学別科ホルン専修後、声楽に転向、同大学卒、同大学院修了。日本音楽コンクールをはじめ数多くの入賞歴を持つ。

透明かつ柔らかい声と透徹したテキスト解釈で安定した歌唱をみせている。

バッハ・コレギウム・ジャパンのソリストとしても、数々の演奏会やレコーディングに参加。

歌曲の分野にも力を注ぎ、特にロシア歌曲の歌唱、解釈での評価は高い。

CD「トルストイのワルツ〜ロシア文豪の音楽〜」(キングレコード)は音楽誌上で好評を得る。

**小田川哲也 Tetsuya Odagawa (バス)**

東京藝術大学卒業。同大学院を経て、二期会オペラスタジオ第38期マスタークラス修了。修了時に優秀賞受賞。『ラ・ボエーム』コッリーネでオペラデビュー以降数多くの主要なバスを演じており、二期会では創立60周年記念公演『パルジファル』ティトゥレルの他、同『マクベス』医師、『サロメ』ナザレ人等で堅実な演唱を披露。またバッハのカンタータや受難曲、モーツァルトのレクイエムなどソリストとしてコンサートでも活躍している。日本声楽アカデミー会員。二期会会員。

**小藤洋平 Yohei Kotoh (バス)**

国立音楽大学声楽科卒業。尚美ディプロマコース及びハンプルク音楽院修了。声楽を鈴木惇弘、竹内則雄、K.ショホの各氏に師事。第12回友愛ドイツ歌曲コンクール入選。これまでにバッハ《マタイ受難曲》《ロ短調ミサ曲》、ヘンデル《メサイア》、ベートーヴェン《第九》等のソリストを務めるほか、アンサンブルにおいても多くの経験を持つ。2011年度まで国立音楽大学音楽研究所(バッハ部門)研究員。アンサンブル・ミリムおよびHFJキャノンズ・コンサート室内合唱団メンバー。

《メサイア》概説

渡部恵一郎

《メサイア》の成立の最初のきっかけとなったのは、従来アイルランド総督ウィリアム・カヴェンディッシュの依頼によるダブリンの慈善演奏会であったとされてきた。しかし、そもそもの作曲のきっかけはどうもそれより先、台本作者のチャールズ・ジェネズにあったようである。《メサイア》作曲開始の一月ばかり前、ジェネズは友人につきのように書いている。「ヘンデルはつぎの冬にはなにも行わないと言っていますが、私とすれば、かつて彼のために作ったと同じような〔《エジプトのイスラエル人》を指す〕、新しい聖句集に彼が作曲し、受難週間に彼自身の慈善演奏会で演奏するよう説得したらよいのではないかと思っております」。すなわち、ジェネズはロンドンにおける慈善演奏会を考えていたことが分かるのである。

しかし結局《メサイア》は、ダブリンにおける慈善演奏会のために書かれることになった。そして、周知のように、ダブリンのフィッシュブル・ミュージック・ホールで1742年4月9日慈善演奏会において成功のうちに初演されたのである。しかし、いずれにせよ、「慈善演奏会」のために書かれたこのオラトリオはヘンデルの数あるオラトリオの中でもきわめて特殊な性格を持つものとなった。

ヘンデルのオラトリオは、全体として見る時、その内容や形式は、とても「オラトリオ」という言葉のなかにくくることの出来ない多様性をそなえている。《メサイア》や《エジプトのイスラエル人》において特殊なのは、両者とも聖書の言葉そのものを歌詞としていることのほか、他の多くのオラトリオにおけるような、物語の進行を運ぶ役柄がなく、それぞれの歌手は、劇中の具体的な人物としてではなく、ある種の思想や情景の化身として登場するだけだということである。したがってここでは、劇の物語はきわめておおまかで希薄なものに過ぎず、生き生きとした筋の進行に伴う緊張力を欠く。《メサイア》はダブリンでは成功したかも知れないが、ロンドンのオペラ劇場におけるオラトリオのシリーズでは、違和感をもって迎えられたのである。1743年のロンドン初演に際してロンドンの聴衆はそのような「宗教的オラトリオ」を全く予期していなかったからである。

しかし一方において、《メサイア》はその特殊な性格にもかかわらず他のオラトリオと共通する性格を持ち合わせている。それは台本作家ジェネズ自身の言葉にもすでに見られるところである。ジェネズ 1745 年にある友人に宛てて、「あなたに、私がヘンデルに与えたメサ

イアという〔聖書からの〕聖句集をお見せしましょう。・・・彼はこれに基づいて・・・素晴らしいエンターテインメントを作り上げました」と書いている。このエンターテインメントという言葉は今日《メサイア》の演奏や理解にあたって十分に銘記しておかなければならない言葉である。1743年の『フォークナース・ダブリン・ジャーナル』の広告にも、「かの有名なヘンデル氏・・・の《メサイア》という音楽のエンターテインメント」と言っているし、キノウル卿なる人物も《メサイア》の演奏後この作品を「見事なエンターテインメント」と称している。この言葉は、今日流行の言葉で言えば催しとか、イベントといった意味である。

事実ヘンデルのオラトリオはそのような意味においてはオペラと同様の社会的機能を果たしていた。1735年に始まるオラトリオの幕間におけるヘンデル自身の独奏によるオルガン・コンチェルトの演奏は、客集めを目的としたアトラクションであり、それはオラトリオの性格の一面の現れでもある(《メサイア》においても行われたかどうかはわからない)。

《メサイア》はこのように少なくともロンドンにおいては一般に宗教的なオラトリオとは考えられてはいなかったのである。ロンドンの教会は、宗教的な物語、中でもキリスト教の中心をなす救世主を主人公に据える《メサイア》が、こともあろうに悪魔の巣窟であるオペラ劇場で演奏されることに対して懸念と抵抗を示した。このような教会の反発は《メサイア》の性格の両面を浮き彫りにしているとも言えよう。

《メサイア》がロンドンにおいて確固とした地位を占めるに至ったのは、ようやく 1750 年以後のファウンドリング・ホスピタル(捨子養育院)における定期演奏会においてである。《メサイア》が宗教的な作品として受容され始める兆しがこの時期にすでに認められる。しかし教会音楽にも似た宗教的受容が始まったのは 19 世紀の、特にドイツにおいてであった。そして、そのような受容のあり方は逆に作品の正当な演奏と理解を妨げ、歪めてきた。今日《メサイア》は理解し直さなければならないのである。生み出された社会的条件を離れる時、音楽作品は一人歩きを始めるからである。

執筆者紹介:わたなべけいいちろう(1932-2001)。鳥取県生まれの音楽学者。特にヘンデル研究家として有名。元桐朋学園教授。同大学の古楽器科の創設に関わり、同科を育成した功績は大きい。1994 年以来様々な団体とともにヘンデルの劇作品の企画構成演出に携わり、98 年に日本ヘンデル協会を創設した。

今回の《メサイア》公演に寄せて ～共演するジョン・エルウィスのこと～

渡邊 順生

私とジョン・エルウィスの付き合いは、今年でちょうど25年になります。彼を日本に招いて、初めて一緒に演奏したのがヘンデルの《メサイア》でした。四半世紀もの長い間付き合い合って来て、振り出しに戻った感があります。

25年前、私どもは、始まったばかりの栃木〔蔵の街〕音楽祭に非常に力を入れていました。日本で初めての本格的な古楽の音楽祭でした。私は、この音楽祭の中心的なアーティストの一人でしたが、当時は、まだ経済状況も良かったので、音楽祭のメインの出し物としてヘンデルの《メサイア》を選んだとき、是非ヨーロッパから一流の音楽家を招聘して、日本人の器楽奏者たちと一緒に、世界に誇れるような演奏を作り上げよう、ということになりました。いざ人選にかかったとき、私がアムステルダム音楽院に留学していた日以来、ヨーロッパの歌手たちの中で最も印象に残っていた歌手たちに声をかけたのですが、その筆頭がジョン・エルウィスでした。

彼は、私の師匠でもあり、ヨーロッパの古楽演奏の中心の一人でもあった巨匠グスタフ・レオンハルトの大的お気に入り、レオンハルトは、エルウィスをラモーやモンテヴェルディの主演に据えたり、バッハの受難曲やミサ曲、カンタータなどに起用して、数々のステージやレコードを作っていました。

私は、彼のように有名で実力のあるスター歌手が我々の呼びかけに応じてくれるものなのかと、心配しながら、おそろおそろ依頼の電話をかけたのですが、意外にも気さくに話に乗ってくれ、二つ返事で日本での企画への参加を引き受けてくれました。

当時は、我々日本の古楽奏者たちは、ヨーロッパの一流の音楽家と共演する機会などほとんどなかった時代ですから、《メサイア》の最初のリハーサルで彼の見事な歌唱に接したときは、みんなで一斉に驚きと感動のため息を漏らさずにはいられなかったほどです。彼は、イギリス人らしいユーモア感覚の持ち主ですから、そんな我々の様子を見て、「どうしたの？オレの顔に何かごみでも付いてるかい？」といった調子でした。

私は彼とすぐに気があって、それから、2年に一度ぐらいのペースで日本に来てもらっては、モンテヴェルディのオペラ《オルフェオ》のタイトルロールやマドリガーレ、種々のバロック歌曲、バッハの受難曲の福音史家、古典派やシューベルト、シューマンらの歌曲など、次から次へといろんな企画を考えて一緒に演奏してきました。更に、シューベルトの三大歌曲集《美しき水車小屋の娘》、《冬の旅》、《白鳥の歌》やアイルランド歌曲集などのレコーディングもしました。彼は、バッハ・コレギウム・ジャパンの《メサイア》の録音にもソリストとして参加しています。

また、私の母校でもある一橋大学兼松講堂における私どものコンサートでは、2010年にバッハの《ヨハネ受難曲》で福音史家を、2014年はモンテヴェルディの《聖母マリアのタベの祈り》で数々のソロを歌ってもらいました。彼はもう60代の後半になりますが、未だに衰えるどころか、そのますます円熟ぶりを増した歌唱に感銘を受けた方も大勢いらっしゃると思います。

昨年の《聖母マリア》では、ソロ・パートだけでなく、合唱にも参加してもらいました。そして終演後の打ち上げの席で「次は何をやるのか」と相談したとき、この《メサイア》の企画が浮上したのです。彼は、《メサイア》でも、《聖母マリア》と同様、合唱も担当して、長年に亘る自分と《メサイア》の付き合いの総決算をしたい、と言うのです。我々としても願ってもないような企画です。私の脳裏に、最初の出会いの場面がまざまざと甦ったのは言うまでもありません。

“コンサート・ホール” 兼松講堂

一橋大学のシンボリック建物・兼松講堂は、その響きの良さから創建（1927年）以来、内外の代表的音楽家が多数来演、近年ではチェコフィルハーモニー（指揮アシュケナージ）やウィーンフィル・ベルリンフィルのトップ奏者たちが演奏するなど、“コンサート・ホール”としても親しまれています。

- ◆ 兼松商店（現、兼松㈱）の創業者・兼松房治郎の遺訓により寄贈されたことによりその名を冠している。
- ◆ 設計は、築地本願寺、明治神宮などを手掛けた日本の近代建築の草分け伊東忠太博士。大学の建築物としては珍しいロマネスク様式で、国の登録有形文化財に指定されている。

2004年3月、社団法人・如水会（一橋大学の同窓会組織）による募金で77年ぶりに音響的にも配慮された大改修が行われ、自然な響きを持った本格的なコンサート・ホールとして蘇ったのを機に、「くにたち兼松講堂 音楽の森コンサート」や一橋大学管弦楽団の演奏会が定期的に行われています。

“講堂”ゆえに、コンサート・ホールとしては容積がやや狭いため、大編成のオーケストラには不向ですが、独奏楽器や小～中規模の古楽演奏にはピッタリの音響空間です。

* 詳細⇒公式ホームページ (<http://www.josuikai.net/circle/josuiconcert/>「如水コンサート企画」で検索) 参照。



ワインは生きている。

作り手から預かった大切なお酒を
最高の状態でお客様にお届けしたい。

地下の低温ワインセラーでは
徹底した品質管理で作り手の真心と
風味へのこだわりを守っています。

